

## 日米間の結婚生活意識についての比較調査

羽 村 省太郎・カーガンレオナルド(Cargan Leonard)\*

阪 井 敏 郎\*\*

岡山理科大学教養部

\*ライト大学教授

\*\*大阪女子大学名誉教授

(昭和63年9月30日 受理)

### I. はじめに

この日米間の結婚生活意識についての文化比較の調査は、アメリカのオハイオ州にあるデイトン(Dayton)市と典型的な地方都市である日本の岡山市との住民の結婚生活意識についてのものである。

この問題を取り扱う方法としては約50万の人口をもつデイトン地域から400世帯を調査対象とし、調査方法として無作為抽出方法を採り、質問事項をもとに個別に回答者に面接を行った。この質問事項は77項目を含み、孤独感、幸福感、健康状況などの生活意識に関するものであった。この質問事項を人口統計上、デイトンの人口とその地域面積がほぼ類似する約60万の人口をもつ岡山市にも適用し、この調査結果が欧米型社会のみならず、もっと広範囲に適用性をもつものかどうか調査した。この調査方法も同じ無作為抽出方法を採っているが、今回は書面により郵送した。1985年の選挙人名簿に基づいて成人20歳以上のなかから回答者を抽出し、750通を郵送しそのうち216通の回答をえたが、これは全体の29%にあたる。調査対象として結婚生活上の健康と幸福について取り扱ったから、既婚者の部分のみを対象にした。デイトンでは132人の女性と108人の男性、岡山では90人の女性と70人の男性が対象となっている<sup>1)</sup>。

この二国の既婚者の取り扱いでは、人口統計上の相違がみられ、日本の男女はアメリカの男女に比べ結婚年齢が高く、日本の女性の初産年齢は遅い。しかし、日米とも結婚率は高く結婚男女の年齢差は同じ位である<sup>2)</sup>。

### II. 概 要

1. さて、人間の社会生活において結婚は幸福の担い手として存在しているであろうか。結婚は、夫婦にとって孤独感による精神上のストレスや身体上の健康の諸問題に対し、その庇護の役割効果をもっているであろうか。

先ず、幸福の担い手といわれる結婚は果して男女に平等に配分されているであろうか。

この点に関して女性は、男性より結婚による精神的なストレスと結婚による満足感双方において勝るという考え方や(Glenn)<sup>3)</sup>、結婚は、女性にとっては幸福と健康上の諸問題について余り好ましからぬという考え方(Bernard)<sup>4)</sup>、既婚女性は既婚男性より精神的疾患の割合が高いという考え方(Gove)<sup>5)</sup>などみられるが、果してそのような相違があるであろうか、又、これらの事実は、さらに欧米型の結婚以外に日本でもみられる共通する現象なのかどうか問われる。

この点に関し、女性の回答による総体的幸福感や飲酒や自殺傾向などの調査をしてみたが、その結果は否定的な場合もあれば、肯定的な場合もあった。結論として、Glenn の見方である結婚によるストレスと満足感双方とも、女性は男性よりもその割合が高いという証明はできなかった。又、性別による日米双方の健康上の諸問題の調査結果に差異がなかつたが、アメリカの調査データーは、Glenn と Bernard の説に沿っていた。

さて、社会生活における家族という存在が、職場として、或るいは、家族成員の庇護や、子供の教育及び娯楽の場としてその機能が減少してきたにも拘らず、家族生活は、精神的な幸福の担い手として、又、個人的発展の軸となるものとしてみられている。(Ackerman)<sup>6)</sup>。しかしながら、Bernard が彼女の著書「**未来の結婚**」のなかで、前述の如く結婚による恩恵は、男女双方に等しく与えられていないという。彼女の調査によると精神的ストレスの徵候は、結婚による性別範ちゅうのなかで、既婚女性に頻繁に現われているといい、結婚によって夫の方が妻よりもっと幸福だとみられている。そして、既婚女性は、結婚によつてくずれ易いし、大体の場合、妻は結婚による恩恵に浴さないか、或るいは、全く浴さない場合があるという見方をしている<sup>7)</sup>。

Gove は、彼の研究で結婚生活は妻にとって広範囲に情緒的な不安定を負わせるといい、Bernard の見解に賛成している。彼は、また、現代の欧米社会の既婚女性は既婚男性より精神的疾患が著しく高いことを示しているという。即ち、独身男性と独身女性の諸々のタイプを比べてみた場合にみられなかつた結果があつた。事実、これらの独身女性は独身男性より精神的疾患をもつ割合が低いと述べている<sup>8)</sup>。

先程述べた Glenn は、彼の叙述で結婚はアメリカの女性にとって強いストレスとなるという Bernard のデーターを支持するが、既婚男性は既婚女性程個人的な幸福感をもたないと考える。このことは、全体として女性は男性より結婚によるストレスと満足感があるとする結論になる<sup>9)</sup>。

しかしながら、Bernard はこの点に関し既婚女性の回答にみる個人的な幸福感や満足感には、既婚女性が結婚生活に適応しようとするか、調和していくかの現われとして把え、その幸福についての矛盾点を説明している。即ち、既婚女性は幸福であるべきこと、又、幸福であると思うようになると<sup>10)</sup>。

Glenn は、この点に関し、回答による幸福感には男性と女性とでは本質的に違うものがあるとは思えない反論する<sup>11)</sup>。

要約してみると、結婚は心理上のストレスに対し、その庇護の役割として存在する (Braito, Anderson<sup>12)</sup>), (Pearlin, Johnson<sup>13)</sup>, & Somers<sup>14)</sup>)。しかし、この庇護の役割は女性より男性のためにあり (Gove)<sup>15)</sup>、女性の幸福に対する障害にもなりえよう (Bernard)<sup>16)</sup>。

以上のことから、理論上初めに二つの説が成り立つ。第一に、既婚女性は個人的に心理上のストレスと身体的症状をより多く訴えているように思われる。第二に、既婚男性が女性より個人的幸福感の割合が高いように思われる。

次に第三の説として Bernard の見方が推論される。既婚女性の自己の幸福についての諸欲求にみる調査資料では、総体的な幸福を必ずしも示していないから女性より男性の方に個人的幸福感が強い予測がたつようと思われる。

2. 次に、結婚生活における日米の夫婦間の役割変化はどうであろうか。この点では社会生活上にみられる外出や、その外出欲求を調査してみた。

この結婚生活上の夫婦の役割変化は、アメリカでは進行しており、日本では進行していない。日本では妻は主婦としての伝統的な役割形態を維持し、夫は生計維持者として存在するが、アメリカの妻は大多数職場に進出し、生計維持者としての夫の役割に挑んでいる。この文化的相違は、日本の妻は家庭外での仕事をもっていないから、アメリカの妻よりもっと活発な社会生活を営むであろうと思われる。しかしながら、Gove の説によると、既婚女性の将来に対する見通しの欠如は、回答にみる低い幸福度になると思われる<sup>17)</sup>。故に、アメリカの既婚女性は、仕事をもっていることで将来に対する見通しをもつことになるから、総体的幸福度の回答では高い率を示すことが予想される。このことをストレスが加えられるという立場からみると、日本の男性の場合、自分の職場の地位が女性によって進出されていなかからしてアメリカの男性より高い総体的な幸福度があると思われる。

しかしながら、この初めの説は正しくないことがわかった。日本の女性は、あらゆる調査項目の分類のなかで、社会生活にみられる外出が少なかった。この点は日本の妻とアメリカの妻との際立った対照を示していた。又、アメリカの女性は、日本の女性よりも高い総体的な幸福度を示しているようだが、その相違は僅少であった。しかしながら、日本の男女双方による総体的な幸福度は、自殺問題とか、その他の結婚生活上の比較からみて、他国の男女と比べた場合疑わしい点がある。

調査の結果は、アメリカの男女の役割変化は、他方で女性に自立を促しているが、必ずしも男性にとって不幸を生み出す要因となっていない。

日米にみる文化上の男女の役割は、一見したところ両極端を示していた。アメリカの既婚男女の役割は、家族をもつ一方、既婚女性の役割変化の進行をさらに維持しており、家族を維持していく同時に正規の職場にも精を出している。他方、日本の文化圏では、妻は家族をもち維持するために家庭に残り、夫は生計維持者として家族を扶養するということになる。この日米既婚女性間の文化的相違は、過重労働や平等とか幸福の問題に関し差異

がみられる。

実際に、アメリカの既婚女性は職場と家事に追われているとすれば、日本の既婚女性よりも社会生活上の活動の時間が少ないように思われる。しかしながら、この調査研究では職場をもっているアメリカの妻は、社会的な活動と共にさらに家事の仕事をしている。

Gove が、既婚男性より既婚女性が高い率の精神的疾患をもつ理由の一つには、"自分達の将来の不安感と見通しがたたない"ことによる緊張状態があるという<sup>18)</sup>。これは、また、Bernard が、既婚女性が既婚男性より総体的幸福に劣っていると説明する理由の一つである。

しかしながら、文化上の比較を基礎としてみて、アメリカの既婚女性は、日本の既婚女性よりも自分の将来への見通しの緊張も少なくみえ、総体的幸福についての回答も優ると想像される。このことは、Glenn のいう概して女性は、結婚生活によるストレスと結婚による満足感双方において男性より強いということに等しいことであろう<sup>19)</sup>。即ち、アメリカの妻は、仕事と家庭のため余暇活動の時間が少ししか残されていないが、その両者の均衡を保っており、また、充分な将来の見通しももっていることから、日本の妻よりも総体的な幸福度では高いことが予想される。

上記の二つの考えを総合して、日本の既婚女性は、アメリカの既婚女性よりも家庭の内外で仕事に追われていないから、さらに社会生活が活発であろうかと。しかし、その反対に日本の既婚女性は家庭外の仕事をもたないから、将来についての不安とその緊張感及び回答による幸福度がアメリカの既婚女性より低いということにもなる。

この二つの文化圏にみる既婚男性は、家庭の状況からみて社会生活上であまり制約がないから、既婚男性は既婚女性より社会活動がもっと活発であると想像される。最後に、日本の既婚男性は、性別による役割変化の影響を余り受けていないから、アメリカの既婚男性より総体的な幸福感の回答では高いということを考えられる。

### III. 調査結果

#### 1. 健康状況について

既婚者の健康状況について述べると、心理上と身体上の健康に関する諸問題に及んでいる（表1）。

心理上では健康に影響を及ぼす五つの感情面と二つの心的状況を調査した。予想に反し、日本の男女間にはストレスの感情面の全体の数値には相違がみられなかつたが、特定のストレスの感情面に関して若干の興味ある相違がみられた。例えば、女性のみが、"うつ症状"が強いとか（女性6%に対し男性0%）,"心配症"は男性より女性の方に少しばかり多くみられるとか（女性7%に対し男性3%）。他方、"無気力感"は、日本の男性に若干多い傾向があった。（男性7%に対し女性3%）。

アメリカ側の表は予想通りで、アメリカの既婚女性はアメリカの既婚男性よりストレス

表1 健康状況

	日本		米国		総合			
	女性	男性	女性	男性	日本	米国	女性	男性
ストレスによる諸感情	%	数	%	数	%	数	%	%
うつ症状	6	5	0	0	11	15	6	4
不安感	9	8	9	6	2	3	4	6
罪意識	2	2	4	3	13	17	7	6
心配症	7	6	3	2	18	24	14	10
無気力	3	3	7	5	10	13	9	8
合計	5	24	5	16	11	72	8	7
ストレスによる状態								
衝撃的に泣き出すこと	3	3	0	0	8	11	1	6
不眠症	8	7	10	7	20	26	14	12
合計	6	10	9	7	14	37	7	7
身体的症状								
頭痛	10	9	10	7	31	41	21	17
高血圧	8	7	7	5	14	18	13	11
胃潰瘍	2	2	10	7	4	5	7	8
合計	7	18	9	19	16	64	14	12
ストレス諸感情総合	5	24	5	16	11	72	8	7
ストレス状態総合	6	10	5	7	14	37	7	7
身体上の症状総合	7	18	9	19	16	64	14	12
合計	6	52	6	42	13	173	10	8

の感情面が少しばかり多いようだ(女性11%に対し男性8%)。さらに、アメリカの既婚女性は既婚男性より多く“うつ症状”を示し(女性11%に対し男性6%), “罪意識”は、女性13%に対し男性7%, “心配症”は、女性18%に対し男性14%であった。

この二国間の対照では、アメリカの既婚男女の方が日本の既婚男女よりも多くの心理上の問題を抱えているようだ(アメリカの10%に対し日本の5%)。前述の説からみて、ここでは女性が男性より心理上の問題点を多く示している(女性9%に対し男性7%)。しかし、このことは特にアメリカの男女の方に相違がみられる。

ストレス状態の結果、“衝動的に泣く”というのは、女性で92%を示す。この統計はおそらく女性特有の生理機能上からみた性別による強いストレス反応を示しているのであろう。他方、“不眠症”は性には無関係でアメリカの例が予想通りの結果であったからアメリカの女性はアメリカの男性より不眠症の訴えが多いようだ(女性20%に対し男性14%)。一方、日本人の例ではその相違は僅少だが、実際には男性の方が女性の方よりもより多く訴えているようだ(男性10%に対し女性8%)。この二番目の表項目では、アメリカ人の方が日本

人の方より健康上の問題を多く抱えているようである(アメリカ人11%に対し日本人5%)。

この健康状況の表の最後のものは、身体上の症状のものであり、その結果は前の二つの回答にみられるものと類似している。男性10%に対する女性2%を示す“胃潰よう”を除き、日本の男女には変りがない。又、健康上の問題ではアメリカの女性はアメリカの男性より問題が多いようで、身体上の症状では女性16%に対し男性14%と少し多い。特に、“頭痛”において多くみられる(女性31%に対し男性21%)。それで、これもまた、アメリカの方が日本人の方より健康上の問題を抱えているようである。

これらの健康上の全ての諸問題の結果を要約すると、表1では、アメリカの例のみが、予想通り既婚女性が既婚男性より多く健康上の諸項目について男女間に相違がみられた(女性13%に対し男性10%)。この点に関し、日本人の男女間には相違がない。

個々の健康上の諸要因の結果を観察して、概してアメリカの方が日本人の方より二倍以上これら健康上の症状を訴えているのは当然のように思える。

## 2. 幸福状況と関連する諸要因

第2の説に沿って、表2によれば、男性は女性より大体幸福に生活していると言っている(男性88%に対し女性83%)。これは日米ともに変りなく、その相違もたいしたこともない。しかし、健康上の結論と異なり、少し意外なことは日本人の方よりアメリカの方がより幸福な時間をもっており(アメリカ人88%に対し日本人81%)、アメリカの女性は日本の女性より多く大体幸福な時間をもっていることである(アメリカの女性86%に対し日本の女性80%)。この点に関し、社会生活にみられる外出の項目とも関連する(後述)。

さて、既婚女性の回答による幸福感には、高い心理的な幸福度を示していないとのBernardの主張に対し、飲酒と自殺傾向の二つの面から調査した。日本での飲酒に関する質問事項の調査結果はここでは採用できなかつたが、日本人の飲酒については高い消費量を示すある種の統計がある。日本の余暇開発センターの調査によると、日本人の飲酒は、家庭で33%，友達との付き合いで25%，何かの行事やお祝いごとで20%，商談上で13%，その他で7%となっている<sup>20)</sup>。

表2 幸福状況について

	日本						米国						総合	
	女性		男性		合計		女性		男性		合計		日米男女	
	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	%
幸	福	80	71	82	56	81	127	86	113	91	98	88	211	83 88
ど	ち	ら	で	も	な	い	12	11	15	10	13	21	9	12 10
不	幸	8	7	3	2	6	9	5	7	3	3	4	10 6	
合	計	57	89	43	68	100	157	55	132	45	108	100	240	56 44
X <sup>2</sup>													1.60>.45	

表3 自殺傾向について

	日本						米国						日米合計	
	女性		男性		合計		女性		男性		合計		女性	男性
	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	%
自殺を企てようとした	5	4	0	0	3	4	3	4	2	2	3	6	4	1
自殺を思い込んだ	17	13	16	10	17	23	2	3	0	0	1	3	8	6
多少思い込んだ	7	5	10	6	8	11	22	29	33	35	27	64	16	24
一度もない	71	55	74	46	73	101	73	95	65	69	69	164	72	69
合 計	55	77	45	62	100	139	55	131	45	106	100	237	55	44
X <sup>2</sup>													3.71 > .30	8.93 > .11

表4 既婚知人との結婚生活の比較

	日本						米国							
	女性		男性		合計		女性		男性		合計		女性	男性
	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	%
知人の方が幸福	21	18	17	11	19	29	10	13	8	9	9	22		
同じ程度	74	64	76	50	75	114	72	95	76	81	74	176		
知人の方が不幸	5	4	8	5	6	9	18	24	16	17	17	41		
合 計	57	86	43	66	100	152	55	132	45	107	100	239		
X <sup>2</sup>													.90 > .64	.43 > .81

国税局の統計による1986年の人一人当たり平均消費量は、全国平均で清酒は11.4リットル（岡山県で13.7リットル）、ビールだと一人当たり40.4リットル（岡山県だと34.8リットル）となっている<sup>21)</sup>。他方、アメリカの男女ではあまり泥酔することはみられない。

次に表3の自殺傾向をみてみると、日本人の方がアメリカ人より“自殺を思い込んだ” “自殺を企てようとした”が多いようだ（日本人20%に対しアメリカ人4%）。日本の女性の5%が“自殺を企てようとした”ことがあり、17%が“自殺を思い込んだ”ことがある。この数値はアメリカの女性では前者が3%に対し、後者は2%となっており、両者を比べてみた場合、顕著な対照を示している。アメリカの例では、この範囲にみられる相違はごく僅かである。これは、健康状況で見る統計表と異なり、アメリカの方方が日本人の方より人生に対する否定的な要因が少ないようだ。特に“自殺を思い込んだ”と“自殺を企てようとした”では、日本人の20%に対しアメリカ人の4%となっている。

Bernardの最後の項にみるように、結婚生活上の幸福の状況についてさらに一層の問題を提示している。この場合、その例は結婚している知人と自分達の結婚生活の幸福についての比較をした。本調査の表4をみると、日本人、特に日本の女性はアメリカの女性に比

表5 外出の頻度

	日本						米国						総合計	
	女性		男性		合計		女性		男性		合計			
	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数		
一週に一度かそれ以下	94	84	88	61	92	145	77	101	74	60	76	181	82 326	
一週間に二度	3	3	4	3	4	6	15	19	17	18	15	37	11 43	
一週に三度かそれ以上	2	2	7	5	4	7	8	11	9	10	9	21	7 28	
合 計	56	89	44	69	100	158	55	131	45	138	100	239	100 397	
X <sup>2</sup>													.30 > .86	

表6 外出先(三つの選択順位)

	日本						米国						総合計	
	女性		男性		合計		女性		男性		合計			
	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数		
レストラン	64	58	54	38	60	96	52	69	66	71	58	140	59 236	
映画	7	6	6	4	6	10	23	31	25	27	24	58	17 68	
ナイトクラブ・バー	6	5	31	23	17	27	17	23	19	20	18	43	18 70	
演芸・コンサート	8	7	4	3	6	10	9	12	11	12	10	24	9 34	
友人訪問	53	48	39	27	47	75	51	67	59	64	55	131	52 206	
親戚訪問	53	48	30	21	43	69	41	54	43	46	42	100	42 169	
合 計	60	172	40	115	100	287	51	256	49	242	100	498	100 785	

べて自分達の結婚の方が不満が大きいことを示していた。

例えば、自分達の結婚に対し、“知人の結婚の方が幸福に思う”の回答で、日本の女性21%はアメリカの女性10%に比べて高い。これは、日本の男女総合では19%で、アメリカの男女総合では9%となっている。これに対し、自分達の結婚より、“知人の結婚の方が不幸に思う”の回答では、日本の男女総合で6%でアメリカの男女総合では17%となっている。

### 3. 社会生活にみる外出(表5)とその外出先(表6)

外出は、余暇時間の有効な利用として義務とか、その他の活動から解放された時間として望まれるが、日米アンケート調査からみると余暇時間に関する諸々の制約がみられる。大多数の男女(82%)が、“一週に一度か、それ以下の外出”をしている。この点を比較してみると、アメリカの既婚男女は日本既婚男女より多く外出しているようだ。アメリカの女性の23%は、日本の女性5%に比べて“一週に少なくとも二度外出”している。同じく、アメリカの男性の26%は、日本の男性の11%に対して“一週に少なくとも二度外出”している。日本人の社会生活にみられる制約は、さらに日本の女性に多くみられるようだ。日本の女性は、社会的な外出がもっとも少ないし、日本の女性は、“一週に少なくとも二度の

外出”では、日本の男性の外出11%に対し5%の割合となっている（表5）。

主な外出先は何処か。アメリカ人は度々外出しているが、その行先の一番多い選択順の上位三つをみると、殆んど同じ処である（表6）。これら日米双方の上位三つの選択をみると、“食事”（59%），“友人訪問”（52%），“親戚訪問”（42%）となっている。しかしながら、日本の男性にとって“友人訪問”（39%）と、“親戚訪問”（30%）は、他の選択項目と比べて左程一般的ではない。他方、日本の男性は、“ナイトクラブやバー”（特に現在のカラオケバーといった処）にでかけることが他の項目より非常に多い。特に、これは女性と比べて然程一般的ではない。他方、日本の男性は、“ナイトクラブやバー”（特に現在のカラオケバーは、親戚訪問よりずっと一般的な外出先である。

他の優先選択項目のなかでは、アメリカ人にとって“映画”が日本人より一般的である（アメリカ人の24%に対し日本人の6%）。既婚女性についてみると、女性は大抵料理をすることが多いから外で食事をとりたがるし、そうしたことは日本の女性も日本の男性に比べてみると多いが（女性64%に対し男性54%），アメリカの女性では、アメリカの男性に比べて反対に少なかった（アメリカの男性66%に対しアメリカの女性52%）。

外出に関する幸福について（表2）みると。外出は余暇時間の有効な利用としてその活動には楽しみを起させるものがあるとみられる。これは前述の大体の時間との程度幸福であるかに関連してくるように思われる。日米双方の質問事項による大体の割合では、両者とも大体の時間幸福であると回答しているが、この結論を明らかにするのは難しい。しかし、表5でみるとアメリカの方が日本人の方より度々外出している（アメリカ人24%に対し日本人8%）から、アメリカ人の多くは、日本人よりも殆どの時間が幸福であるように思われる（アメリカ人88%に対し日本人81%）。これに対し、日本の女性の多くは外出が少ないようだし（その平均18%に対し5%），“大体不幸である”との平均4%に対して日本の女性の場合は8%と平均より高いパーセントになっている。

#### IV. 論点と結論

1. 健康についての第一の説を肯定するのはアメリカの方の調査結果にみられ、日本の方のその結果にはみられない。調査結果によると健康上の各項目に対し、アメリカの女性はアメリカの男性に対しより高い頻度で問題がみられた。特に、10項目の健康上の問題のうち二つ（“心配症”と“胃潰瘍”）だけに限ると男性の方が女性より多いが、ここで示された説を肯定する場合、日本の例では一致しなかった。また、“うつ症状”と“胃潰瘍”を除き特定項目については男女に相違はなかった。Goveは、既婚男性より既婚女性の方に強い精神上の症状を示すことを説明しようとするが、それは、女性が将来に対する不安感とか、危惧感や挫折感を抱いているというのと類似した見方である<sup>22)</sup>。この女性の将来に対する不安感とか挫折感は、その社会の文化的傾向にみられるようだ。

2. このような文化的影響による例は、日本社会の倫理的な実際面にも遡ってみられる

と思われる。

例えば、前述の外出（表5）の調査結果にみられるように、日本の女性の外出回数はアメリカの女性のそれと比べて極めて少ない。そこで、ここで社会生活にみられる外出と外出先などの結果からみられる日本人の夫婦の役割分担面ともあわせて一瞥しておこう。

つまり、日本人夫婦の家族生活にみられる生活習慣には、依然としてその文化的傾向がみられる<sup>23)</sup>。

それは、日本の夫は生計支持者として長時間家庭の外で働き、日本の妻は家事、家計の切り回しや、子の養育を強いられている。この生き方は、一つには妻は夫に家事の煩わしさを避けさせるようにしている。この生活習慣は、日本の総理府による女性の幸福についての調査結果にも示される。それによると、夫は外で働き、妻は家庭を守るべきであると考える日本の女性は71%で、アメリカの女性では34%となっており、結婚したら自分自身より夫や子供など家族を中心に考えるというのは、日本の女性で72.0%、アメリカの女性で17.6%であった<sup>24)</sup>。日本では女性は余暇を楽しむなという言い伝えがあるが、これは封建制の時代からの生活習慣の残映であろうか。かつて、武士が家庭の外にあって領主に仕えていた時代の生活意識と同じように、今日、日本の夫は会社での仕事が公的なものと思っており、過去の時代と共通する生活意識として、自分の家事のことより会社の仕事がより重要で何よりも優先すると考えられているように思われる。現代の日本は、見合結婚の時代から恋愛結婚の時代に変わっていった（見合結婚は約30%に対し恋愛結婚は約70%になっている）<sup>25)</sup>。しかし、日本社会では、依然として既婚女性が家庭にあって子供を育て家事や家計を切り回し、夫は生計担当者として夜遅くまで働き会社の目標を達成していくことが強調される。今日、殆どの日本の女性は伝統的な性別による役割に固執している<sup>26)</sup>。

この夫婦による役割は、従前の日本文化の構図にみられた夫唱婦隨とか、男性は女性より優位に立つといった古き生活意識を思い起こさせるが、日本の女性にストレスが少ないというのは、Toffler のいうアメリカの女性が選択過多といわれている社会生活に対し、日本の女性は、それ以上に日本文化の中の結婚生活意識に適応しようとしているからであろうか。

Blood と Wolfe は、アメリカの夫婦関係が次の如き特徴をもっているといっている<sup>27)</sup>。

- (1) アメリカでは夫婦揃って公的なパーティーに参加する。
- (2) 夫婦がそれぞれの情報を交換し合い、お互いのことを十分に知り尽している。
- (3) 妻は夫の仕事についてある程度の役割を分担している。
- (4) 夫婦はそれぞれ友人を共通にしている。（尚、この点に関し、今日、その特徴が薄れてきたと指摘されている。）<sup>28)</sup>

これに比べて日本の夫婦では次の如く特徴づけられる。

- (1) 特別の場合を除き、夫婦が揃って外出する風習は全国的にあまりみられない。
- (2) 日本では伝統的に男性は男性、女性は女性の仕事をするし、男女分業の境界が厳重

でお互いにその領域を侵さないルールがある。だから、夫婦はお互いに相手のことを知らないことが多い。

- (3) 日本の家庭では、夫は外で働き妻は家庭を護るという伝統的な考え方があり、夫は会社の仕事が“公のこと”として妻にあまり喋らない。
- (4) 日本の夫婦は友人を共通にすることは少なく、夫は職場での男性グループ、妻は家庭での女性グループにわかれ、お互いに交流することが殆んどない。

前述の1983年の日本の総理府の調査によると、家庭生活において日本の妻が十分に満足しているというのが25%で、アメリカの妻の66%に比べるとこのことは当然のことと思える<sup>29)</sup>。

結婚生活意識に関連するこれらの異なる結果に拘らず、日米の夫婦生活で大多数のものが大体幸福であると言っているが、女性の結婚生活上の役割の文化的基盤には、男性よりも多く心理上の感情面に否定的な要因がみられるが、明らかに、これは個人的な満足度一般におきかえられない。それにもまして、第二の説にみられる日米の既婚男性は、日米の既婚女性よりも多く大体の時間幸福であるようにみえるが、そこにおける相違点は、さほどでもなかった。しかしながら、文化的基盤から健康と幸福についての欲求関係で、アメリカの男女には健康に関する問題を抱えており、大体幸福だと言っているのは疑問に思えてくる。

3. そこで、この観察は、第三の説に近い。それは、Bernard が主張する女性の幸福についての調査にみられる諸感情は文化的強制ということになるのか。もしそうだとすれば、日米の結婚生活についての文化的相違を調べる必要があるし、飲酒消費量や自殺傾向が不幸を反映しているかどうかを調べてみる必要もあり、ここで幸福度に対する数値が疑わしくなる。

そこで、日本では飲酒消費を促進させるような要因が多くあるかどうかである。その要因のなかの一つに日米の宗教上の相違点があげられよう。アメリカにおいては、初期のキリスト教教義ではあらゆる生活領域にその統制が及び、飲酒に関する規制ではおそらく1920年代のアメリカ憲法の修正禁酒法にその好例をみることができる。他方、アジアの日本では、アルコール中毒者に対する社会的規制以外に、仏教とか神道による統制的なものは一般に存在しない。事実、飲酒を促進さえしている。というのは、僧侶さえ“般若湯”といって寺院のなかでの生活でも飲酒しているし、法事にはその親族と一緒に酒を飲み付き合うことがしばしばみられる。

飲酒を促進させるもう一つの要因には、日本は自然の景勝の地に加え四季の変化に富み、その時折に人々が相互に意思疎通をさせる意味で盃を酌み交わす慣習がある。例えば、春には春の花見酒、秋には秋の月見酒といって日本人には自然を鑑賞し、賛美し、詩を吟じ盃を交える。そこには人間的な付き合いがより円滑に行われるよう“付き合い酒”といった日本の文化圏がある。日本人は自分だけの殻に閉じ籠り素顔ではなかなか打ち溶けない。

こうしたときに、付き合い酒が心をときほぐしてくれる。

前述の余暇開発センターの調査によると、33%が家庭のなかで飲酒している。その男性の割合は78%で、女性の割合では64%で、殆んど毎日飲酒している<sup>30)</sup>。この数値は、夕食のだんらんで“晩酌”といって毎晩一、二合のお酒を飲む食習慣があることを示している。又、一般の慣習として深酒（酔っ払い）の無礼講が許されている。酔い天国と言われたことがあったが、これが飲食に対する一つの促進ともなろう。

そこで、こうした慣行的な飲酒や飲酒消費量が多いということが不幸な結婚生活の反映とみるか。或るいは、ストレス過剰からの解放かどうかの判断を示すことはできないのである。一見して飲酒量の多いということが不幸の反映としてみることができない。しかし、前述の余暇開発センターの調査から最近では男女双方とも飲酒が飛躍的に増えていることが明らかになっている。

次に、自殺傾向の統計資料から幸福状況についての調査では、予想した通りの結果でなかったことが付け加えられている。特に、日本の女性について示されるその22%に及ぶ“自殺を思い込んだこと”と“自殺をしようと企てたこと”的パーセントは、他の調査の範ちゅうのものと比べて非常に高い。特に、アメリカ人のと比べてみて顕著である。前述の如く、日本の女性は、結婚生活上のその社会的地位からみて、自己啓発の機会に恵まれておらず、自殺思考とその企てようとしたことの比率の高いのはその反映としてみられるのではないだろうか。

自殺件数の調査統計資料によると、人口10万人に対しアメリカでは12.2人（1983年）日本人では21.1人（1986年）と自殺率の高さを示しているが<sup>31)</sup>、日本での実際の自殺件数では男性の方が女性の方より、約1.9倍多いが<sup>32)</sup>、男性の自殺原因、動機をみると、病苦、経済生活問題、勤務問題などが多く、家庭問題では男女とも均衡しており、動機の構成比では女性が11.8%と男性の8.7%より高いことが示されている<sup>33)</sup>。この調査の回答では、女性としての現実の心理面を反映しているのかも知れない。もっとはっきりした資料で示すとすれば、前述した自分の知人の結婚の方が自分達の結婚より幸福だと思っているのは、アメリカ人より日本人の方が多いということである。他方、アメリカ人は、既婚の知人の結婚の方が自分達の結婚よりも不幸のように思っている。この対照は女性の方にはっきりと現われている。だから、日本の女性は、アメリカの女性程自分達の結婚が幸福でないことを示しているとみられる。

自己回答による既婚女性の幸福の主張には、女性の総体的な幸福が反映していない。上述の総合結果は、日本の女性に対しては第三の説が肯定される。アメリカの女性に対しては第二の説に疑問をさしはさむ。というのは自分の結婚生活は夫のそれより多少とも幸福だとみられるからだが、健康面では否定的で男性より多少悩んでいるように思われる。

4. 既婚者の総体的な幸福について、Glenn の見解だと既婚女性は既婚男性より心理的なストレスを強く訴えるが、総体的に既婚男性より幸福であるとする彼の結論になる。しか

しながら、彼の調査結果の初めの考え方、既婚女性の方が既婚男性より心理的ストレスが強いとする結論づけは、アメリカの女性にだけ当てはまり日本の女性にあてはまらず、また、アメリカの女性にはアメリカの男性より多く健康上の否定的な諸要因がみられた。しかしながら、どちらの既婚女性にも既婚男性よりも総体的な幸福が高いことが示されなかった。それ故“総体的に女性は結婚によるストレスと結婚による満足感双方とも男性に勝る。”<sup>34)</sup>というGlennの見解は証明されなかった。こうした結論づけにも拘らず、既婚女性にみられる総体的幸福についてのパーセントは、その健康上の状態と幸福の欲求の双方にみられる相違が僅少であったことから、Bernardが主張する結婚生活への適応によっているのかどうかを示すことが必要である。飲酒消費量や自殺傾向についての結婚生活の比較調査では、日本人の総体的な幸福の欲求に疑問があった。特に、日本の女性に顕著にそのことがみられる。

5. 最後の社会生活にみられる外出と外出先の調査では、職場環境にみる変動していく諸法則や仕事の過重とか男女平等の問題と関連があるかどうかの証となる。この点でも幸福の度合の調査に関連する。社会生活にみられる外出と、レジャー活動として関心をもつ時間と総体的な幸福についての自己回答率の関係を考えてみると、すでに、2の健康上の諸問題のところでふれた如く、日本の男女共アメリカの男女より外出が少なく、一週に一度程度である。日本人の伝統的な男女性別による役割分担の考え方から、男性は仕事を公事と考え、一週に六日それ以上に夜間も仕事をし、時間的にみて非常に制限があるが、日本の女性に比べてみると一週のうちの外出が多いと思える。総体的な幸福感からみると、日本人の幸福についての高い自己評定は疑問視される。アメリカ人との直接の対照として、多くの日本人は自分達より知人夫婦の結婚生活の方が幸福とみていることがここでも注意される。日本の女性は仕事過重でないけれども、アメリカの女性に比べて社会生活上であまり活動的でない点がみられる。日本の女性には、心理的な幸福度が高いというよりも、むしろ、Bernardのいう如く結婚生活に適応しようとする反映だと思われる。

日米の既婚男性の範囲では、日米の既婚女性よりも社会上の外出が多いようだ。しかし、この相違も僅少であった。終りに予想とは対照的にアメリカの男性は日本の男性に比べ、総体的幸福の回答では高い割合を示しているようだが、これもその相違は僅少であった。

これらの結果から、アメリカにおける男女性別による役割の変化は、他方で女性にとっての支配と幸福の基を提供しているが、男性にとって不幸をつくり出す要因にはならないと結論づけられる。しかしながら、この二か国の文化に見出される大体の相違はここでは限定されており、さらに一層の質問調査が必要であろう。

#### 脚 註

1) この質問調査事項は、1985年4月に行った。この調査資料は、既婚男女が対象となっており、下記に示

した全体の年令構成から主に中高年層をみると、40歳以上は50.69%で、50歳以上となると31.02%となっている。この調査結果からは、比較的に保守的な性格面がみられた。

年齢	人数	%
20—24	22	10.32
25—29	28	13.14
30—39	55	25.82
40—49	44	20.65
50以上	67	31.02
	216	

- 2), 26) Kumagai Fumie "The Life Cycle of the Japanese Family" American Sociological Association, 1983
- 3), 9), 11), 19) Glenn, Norval D. "The Contribution of Marriage to the Psychological Well-Being of Males and Females", *Journal of Marriage-and-the Family*, 37 (August, 1975) : 594—600
- 4), 10), 16) Bernard Jessie "Marriage : His and Her" in Leonard Cargan and Jeanne Ballentine (Eds.) *Sociological Footprints*, Boston : Houghton Mifflin (1979) : 114—120
- 5), 8), 15), 17), 18) Gove Walter, "The Relationship between Sex Roles, Marital Status and Mental Illness." *Social Forces* 51, September, 1972 : 34—44 and "Sex, Marital Status, and Psychiatric Treatment : A Research Note," *Social Forces*, V. 58 : 1, (September 1979) : 89—93
- 6) Ackerman, Nathan W., In Harold Hart (ed.), *Marriage : For and Against*, New York : Hart Publishing Company (1972) : 10—26
- 7) Bernard Jessie, *The Future of Marriage*, New York : Bantam Books, 1972
- 12) Braito, Rita and Donna Anderson "Singles and Aging", paper presented at the study of Social Problems, San Francisco (1978)
- 13) Pearlin, Leonard I. and Joyce S. Johnson "Marital Status, Life Strains, and Depression" *American Sociological Review*, V. 42 (October, 1977) : 704—715
- 14) Somers, Anne R. "Marital status, Health, and Use of Health Services" *Journal of the American Medical Association*, V. 241, No.17 (April 27, 1979) : 18—1822
- 20), 30) 齊藤学, 柳田知司, 島田一男編 アルコール依存度 (III 日本人の飲酒行動 148頁) 有斐閣 1979年
- 21) 昭和61年度 広島国税局統計書(広島国税局発行) 103頁(尚、広島国税局の公表によると、岡山県の一人当たり年間のアルコール類消費量は約80ℓ前後になっている)。
- 22) 前掲論文 Gove Walter "The Relationship between Sexes Roles, Marital Status and Mental Illness" *Social Forces* 51, Sep. 1972 : 35
- 23) 註1) でふれたが、本調査結果では保守的な面がみられるが、岡山県民の経済生活面は比較的に安定しており、全国の年間平均一人当たり所得収入が約214万円に対し、約201万円で全国の所得収入順位は19位となっている(県民所得統計年報 昭和60年 経済企画庁 経済研究所編 28頁)。尚、典型的な日本の農村生活実態を調査した Beardsley, Hall & Ward, *Village Japan*, Chicago Univ. Press, 1954は、現在、岡山市に合併されている新池(現在の新庄下町)をモデルにしてその文化的特性を調査していたが、岡山は日本の標準的な地域社会の一つと考えられる。
- 24) 婦人問題に関する国際比較調査結果の概要 内閣総理大臣官房審議室 1983年 12, 13頁
- 25) 第8次出産力調査 "日本人の結婚と出産" 厚生省人口問題研究所 1983年 29頁
- 27) Blood, Robert D. and Donald M. Wolfe, *Husbands and wives : The Dynamics of Married Living*,

New York : Free Press (1960)

- 28) 岩男寿美子 “日本の夫婦、アメリカの夫婦” 日本の家族 日本評論社 1979年 30頁
- 29) 前掲 婦人問題に関する国際比較調査結果の概要 内閣総理大臣官房審議室 1983年 62頁  
尚、ここで1985年の日米の離婚率をみると人口千人につき、日本では1.39人で、アメリカでは4.96人となっており、離婚率は日本人の方が低い（国際統計要覧 総務庁統計局編 1987年 25頁）。これは一つには、日本の女性は自分自身の幸福よりも家庭を重んずる傾向にあり（註24と本文）、その結果として十分に結婚生活に満足していないように思える。反対に、アメリカの女性は不満があれば離婚に踏みきることができるから、離婚率も高くなるが、結婚生活に十分満足している女性の割合がそれだけ多くなっているように思える。
- 31) 国際統計要覧 総務庁統計局編 1987年 223頁
- 32) 警察白書 警察庁編 昭和62年 132頁（昭和61年の自殺件数）  
尚、日米男女の自殺者数をみると、1986年の統計では、日本の男性16,497人に対し、女性は9,027人であり、アメリカの方は、1982年の統計であるが、男性は21,625人、女性が6,617人で人口10万につき12.2人となっている（*Statistical Abstract of the United States, 1986, 106th ed. U. S. Department of Commerce Bureau of the Census, 78.*）これからみると、日米の女性間では日本の方が遙かに多い。
- 33) 前掲 警察白書 133頁
- 34) 前掲 Glenn, Norval D. "The Contribution of Marriage to the Psychological Well-Being of Males and Females", *Journal of Marriage-and-the Family*, 37 (August, 1975) : 598

## A Cross-Cultural Comparison on the Marriage-Life of Japanese and of Americans

Shotaro HAMURA

*Leonard Cargan (Wright State Univ., Emeritus)*

*Toshio Sakai (Osaka Women's College, Emeritus)*

*Faculty of Liberal Arts and Science.*

*Okayama University of Science*

*1-1 Ridaicho, Okayama City, 700 Japan*

(Received September 30, 1988)

In order to test that marriage is seen as a provider of well-being and this benefit is equally divided according to gender and also to see the changing gender roles of the husband and wife in both countries, a random sample was taken from both Dayton, Ohio, U. S. and Okayama, Japan. The findings indicate that there is little difference between the sexes regarding health factors in the Japanese and American sample on marriage comparison, but the declared global happiness of both the Japanese female and male were considered suspect by the findings on suicide-tendency and marital comparison to other people. The other hand, the changing gender roles are ongoing in the U. S. but in Japan. While Japan maintains the traditional form of the wife being the homemaker and the husband the breadwinner. American wives are moving in large numbers into the workplaces and challenge to the men's role of being the only breadwinner. The cultural gender roles in the U. S. and Japan were seemingly seen at opposite ends.